

〔論 説〕

## 認知意味論のカテゴリー観と意味変化 (1)

松 本 理一郎

### 1 初めに

認知意味論では、カテゴリーについて、従来のアリストテレスが淵源とされるところとは異なるものが提唱されている。古典的なカテゴリー観では、その成員は、必要かつ十分な特性をもち、その成員間に軽重の違いはなく、カテゴリーの成員とそうでないものとは、峻別される。これは抽象的な数理的処理や、0と1ですべてをとらえるデジタルコンピューターととても相性のいいとらえ方である。

一方対蹠的に、認知意味論では、おおまかに言うと。カテゴリーの成員は、必ずしも、上記の条件を満たす必要がないというものである。成員間には、目立ったものもあれば、目立たぬ周辺的なものもあり、カテゴリーとそうでないものとの境界線がぼやけている場合や成員間すべてに共通する特性がない場合があり、それはヴィトゲンシュタインのいう家族的な類似性を示すというものである<sup>(i)</sup>。

このようなカテゴリー観の特徴を裏付ける根拠と結びつくもののほとんどが、語の意味変化に見られることが、今回の研究で明らかになった。上で述べたように、伝統的なカテゴリー観では、Aがaというカテゴリーに属するなら、英語表現で、A is a. が成立し、属さないなら、A is not a. が成立する。

### 2 同一の語源

同一性というものが、諸言語で、語源的に遡ると、カテゴリーの曖昧さが、同一性とどのように関わってきたかを、明らかにする例が見つかる。同一性を表す漢語系の言葉には、「同一」を始め、「均一」、「合一」、「一様」、「一致」に見られるように、「一」が現れる<sup>(ii)</sup>。これの和語は、「ひとつ (一)」で、これの形容詞形が、「ひとしい (等)」で、日本語で、「一つであること」と「同じであること」が結びついている<sup>(iii)</sup>。

人口に膾炙した英語の諺 (Birds of a feather flock together<sup>(iv)</sup>。「同じ (一つ) 穴の貉、類は友を呼ぶ。」) に見られるように、one に由来する、不定冠詞の a(n) には、the same の意味がある。ほぼ同じような諺が、印欧語族にある。いくつかの言語の例をあげる：

(i) 出典は Wittgenstein *Philosophische Untersuchungen* による。

(ii) 同じ語族内や中国語と日本語のように密接な文化的影響が考えられる場合は、翻訳借用が当然ありうる。しかし、印欧語族の意味変化と古代の日本語と中国語との意味変化は、独立のもので、言語ユニバーサルと判定できると思われる。

(iii) 日本語の語源に関しては、主に 白川静の『字源』を参考にした。

(iv) 主語の birds of a feather だけでも、クリシェの一種として用いられる。

- (1) Gleich und gleich gesellt sich gern. ドイツ語 (ゲルマン語派)
- (2) Soort zoekt soort. オランダ語 (ゲルマン語派)
- (3) Qui se ressemble s'assemble. フランス語 (イタリック語派)
- (4) Cada oveja con su pareja. スペイン語 (イタリック語派)
- (5) Ogni simie ama il suo simile. イタリア語 (イタリック語派)
- (6) Cada asno com seu igual. ポルトガル語 (イタリック語派)

ここで例にあげた諺に使われている語のいくつかは、以下の分析で取り上げることになる。英語が属する印欧語族には、「同じ」や「一つ (の)」を表したり、それに関連する意味を表す語根はいくつかある。その一つが *sem-* である。英語には、外来語として、フランス語、ラテン語、古典ギリシャ語から多数の語が借用されているので、説明上、可能な場合、原語の代わりにそれを使うことをお断わりしておく<sup>(v)</sup>。

### 3 同一と類似

同一物と類似物は、当然別なものである。しかし、類似物を同じような物というように、両者は当然つながっている。完全な同一物は、厳密には、例えば、水素原子 (some hydrogen atoms) のような場合や抽象的な数学上は、あり得るだろうが、日常世界ではあまり考えられない。現代のような工業化社会には、工場で生産された製品、商品があふれている。例えば、同一の車種の新車など、全く同一のように思われるであろうが、微妙な差異があろうし、いったん別な所有者に渡れば、経年劣化に加えて、装飾や傷などで、全く同じ同型車種と思われていたものが、同じような物になっていく。ヘラクレイトスのいう万物流転である。

同じような物は、一つのカテゴリーにまとめられ、それを表す「いくつかの」は、現代英語で以下のように表現される。

- (7) He played some records for me. Oxford English Dictionary 7版 (以後、OALD と略す)
  - (8) There are some people at the door. 新英和大辞典 6版 (以後、新英和大と略す)
- 代名詞 *somebody* や *something* などに現れ、日本語の「ある」に相当する意味は、古英語以来存在するが、同じような物の一部に焦点が当たった用法であろう<sup>(vi)</sup>。
- (9) Some people find this more difficult than others. OALD
  - (10) There is some man at the door. 新英和大

英語の代名詞 *they* は、侵略してきたデーン人 (Viking) の話していた古ノルド語の影響で現代英語に定着している。彼らの言語は英語と同系でゲルマン語派に属する。同じように、古いノルド語の影響で根付いたのが形容詞 *same* である。

- (11) We have lived in the same house for twenty years. OALD
- (12) I bought the same car as yours. OALD
- (13) Mark Twain and Samuel Clemens were one and the same person. 新英和大

---

(v) 古典ギリシャ語からラテン語に翻訳借用が、当然想定されるし、今話題にしている言語間でも想定されるが、その順序などは、ここでは問わない。

(vi) 音声上は、弱形と強形の違いが関係するが、ここでは問わないことにする。

これらが、日常生活で、「全く同一の」という用法である。今取り上げた some と same の両語が、意味変化の色々な紆余曲折を経て、現代英語で使われているが、両語が、「同一」を意味する印欧語の語根 sem- に遡るという事実は、実に示唆的である。つまり、「同じ」と「同じような」が結びついているということである。既に述べたように、厳密な同一性など、日常生活では本来考えられない。抽象的な数学の世界や、これまた物理学の世界では、存在するものであろう。同一人物であっても、人は常時変化をしている。同一のカテゴリーに属する成員が、厳密には、異なるものであっても、同一のものとして見立てられ、同じものとして扱われる。

古ノルド語の影響で、古英語直系の語が廃れた例に、更に「…のようだ、らしい、思われる」という意味を表す動詞 seem がある。

(14) He seems (to be) a nice fellow.=He seems like a nice fellow. 新英和大

(15) He seems to have been ill. 同上

(16) There seems (to be) no need to tell him. 同上

古ノルド語では、この語は、「適合している、ふさわしい」という意味であったが、最終的に現在の意味となっている。これにはフランス語からの影響も考えられている。既にあげた「A is a.」が、カテゴリーの所属を断定するのに対して、「A seems to be a.」は、その所属をほかすと考えられる。認知意味論的にいえば、周辺的な成員として分類するともとらえられよう。

遡れば、ラテン語にたどり着く多くの語が、語根 sem- に由来する。これは (5) のイタリア語の諺にあらわれている。これは、ラテン語 similis (「似ている、類似の、そっくりの」) に由来し、これから現代英語に「類似している」という意味で定着しているのが以下である<sup>(vii)</sup>。

(17) We have very similar interests. OALD

(18) This is very similar to mine. 新英和大

ラテン語 assimilare (以下長音記号などは表記しない) に由来する assimilate は「同化する、一様にする」意味で使われる。

(19) New arrivals find it hard to assimilate. OALD

(20) The United States has assimilated people of many ethnic groups. 新英和大

古フランス語 resemble (現代のフランス語では ressembler) が定着したのが resemble (「似る」) である。これは、フランス語の諺 (3) の前半にあらわれている。

(21) She closely resembles her sister. OALD

(22) They resemble each other in shape. 新英和大

#### 4 集めることと同一性

語根 sem- に由来する語が、{集める} という意味をもつ場合がある。これは、諺 (3) の後半に、韻を踏む形で用いられている。この意味変化はどのように説明されるであろう

(vii) 以下ラテン語の訳語は、國原吉之助の『古典ラテン語辞典』のものである。

か。同じ語根に由来するドイツ語 sammeln (「集める」) が参考になる。

(23) Heidelbeeren sammeln (コケモモ採りをする) 独和大辞典

(24) Holtz sammeln (薪を拾い集める) 同上

(25) Briefmarken sammeln (切手を収集する) 同上

これらの例を見て明らかになるのは、集める対象は、当然何らかの判断基準のもとに選ばれる、同じ(ような)存在でなくてはならない。闇雲に積み上げても、sem-に由来する「集める」とならない。コケモモを食物として採集すると仮定して考えると、コケモモの中でも、食用に適した、つまり熟したものが選ばれるであろう。コケモモ一つ一つは、一見、同じ漿果と見えるだろうが、それぞれ異なっており、厳密に言えば、一つとして同じものでなく、同じようなものである。薪の場合、山中で集めるとしたら、やはり一つとして同じものはなかろう。この場合、火にくべるのに適する木質のものが、その対象になる。コケモモや薪が自然物であるのに対して、切手は人工物で、日常感覚では全く同一のものもあろうが、趣味の対象となるのは、通常は、切手というカテゴリーに入る異なるものであろう。集めるという行為には、その対象を選ぶ行為が伴うこと、更には、基準に照らして、同じ(ような)存在か異なる存在か、カテゴリーに含まれるか否か、言い換えると、同一性と差異性がからんでいる。ドイツ語 sammeln と同様に sem-由来のラテン語 simul (「一緒に、共に、同様に、同時に」) から来た借用語で、現代英語に定着している語を以下にあげる<sup>(viii)</sup>。

古フランス語 assembler から来たのが assemble (「集める、集まる」) である。

(26) All the students were asked to assemble in the main hall. OALD

(27) She then addressed the assembled company (=all the people there). 同上

この場合、集まるのは、student や people というカテゴリーに入る存在である。しかし、この意味は、現代フランス語では、古風な意味となり、ドイツ語 sammeln で例にあげたような意味は cueillir や ramasser で表される<sup>(ix)</sup>。現代英語 assemble には、集まった結果統一的なまとまりをなすものも対象とする。即ち、「組み立てる」という意味もある。これが、現代フランス語 (assembler) の主要な語義の一つである。現代英語例をあげる。

(28) The shelves are easy to assemble. OALD

ここでは、集められた部品が、適合し、「棚」という形でまとめられている。同様な「調和、適合」という意味がはっきり生まれているのが ensemble (「全体で調和、(服の)揃い」) である<sup>(x)</sup>。

(29) Her ensemble consisted of a dark green suit, a grey coat, and a fur cap. 英和活用

(30) The whole ensemble was very satisfying. (「全体的な調和」) 同上

(viii) 今回は、紙幅の都合上取り上げないが、現代ドイツ語の sammeln (集める) と zusammen (一緒に) との関係は、語根は異なるが、現代英語の gather (集める) と together (一緒に) と同じである。

(ix) cueillir (摘む) に接頭辞がついた recueillir (集める) と elir (選出する) とのつながりは、現代英語の collect (集める) と elect (選出する) との結びつきに概ね重なる。これについては、機会があれば、発表しようと考えている。

(x) 既に見た seem の意味が「調和する」であったことは注目に値する。

(31) a jazz ensemble (「合奏団」) 同上

この語は古フランス語 *ensemble* に由来するが、遡れば、ラテン語 *simul* (「と一緒に、同様に、同時に」) から来ている。語義の一つに「一緒に、同時に」があるが、空間的な接触が、時間的接触＝同時性に転用されることは、以下の英語の例で了解される。

(32) There's a mark on your skirt. (空間的に接触して) OALD

(33) On arriving home I discovered they had gone. (時間的に接触して＝同時に) 同上

この意味は *simultaneous* (「同時の、同時に起こる、同時に存在する」) にも生じている。

(34) There were several simultaneous attacks by the rebels. OALD

時間に関連する語では *sempre* (「いつも、不断に、昔から、永久に、毎度」) がある。これはイタリア語も同型なので、それが英語に流入したとも考えられる。

(35) Si dimentica sempre le chiavi. (She always forget her keys.) Concise Oxford Paravia Italian Dictionary

いずれにしても、日常的な感覚では、簡単に変化しないものは、同一ととらえられ、「毎度同じであること」が「いつも同じであること」や「永遠に同じであること」に拡張されるのは、了解しやすい。この語 *sempre* と関連する語に *sempiternal* (「永遠の」) がある。これは、ラテン語 *sempiternus* (「永久の、絶え間ない」) に由来する。

現代フランス語では、古風な意味となっている「集める」と主な意味の一つ「組み立てる」の変化はどのように説明されるのであろうか。もう一つの主な語義は、「(考え、語などを) まとめる」である。

(36) assembler des mots pour faire une phrase (to put words together ou to combine words in a sentence) The Oxford-Hachete French Dictionary

## 5 集めることとまとめること

部品などをつなぎ合わせて(まとめて)全体としてある機能をもつものを作り出すことと、語などを組み合わせて全体として意味のある文(現代フランス語では *phrase*)を作り出すことは似ている。部品それぞれは異なっているが、それが適合する形でまとめられ、ある機能を果たすものが生まれる。同様に、それぞれの語は異なっているが、意味の通る形でまとめられ文となる。

認知意味論のカテゴリー観では、目立った成員もあれば、周辺的な目立たぬ成員もある。それらが、全体として一つのカテゴリーとしてまとめられる。同じように、異なる部品があり、そこには主要なものもあれば、目立たないのもあろう。全体として適合する形でまとめ、ある機能を果たす。文の場合も同じで、各語には、様々な違いがあり、つながることで。全体として、個々ばらばらの場合と異なる意味をあらわす。

このことを背景に考えると、様々な成員を、全体として一つのカテゴリーの成員としてまとめることが、部品を組み立て、一つのまとまりをなすことや、語をまとめて、全体として一つの意味を表すことの類似性が浮かび上がる。

## 6 他の比喩的拡張

次回以降の分析ともからんでくるので、関連する意味的な拡張にもふれておく。語根 sem- に、語根 plek- (ラテン語 *plicare* (「折る, 折りたたむ, 編む」) がついて生まれたのが *simple* (「単純な, 簡単な」) である。

(37) The answer is really quite simple. OALD

(38) The device is simple to operate. 新英和大

この語は、古フランス語 *simple* に由来する。関連する語に *simplicity* (「単純, 簡素, 無邪気, 愚かさ」) がある

(39) the simplicity of a machine [problem, task] 新英和大

(40) simplicity in dress [style, way of living] 同上

(41) the sweet simplicity of a child 同上

語根 sem- に由来し、英語に根付いている語に *single* (「たった一つの, 単一の, 独身の」) がある。

(42) He sent her a single red rose. OALD

(43) The apartments are ideal for single people living alone. 同上

この語は、古フランス語 *single* から来ているが、ラテン語 *singli* (「(配分数) 一つずつ, 各自の, たった一つの」) から生まれている。関連するラテン語 (*singularis* 「一つのもの (人) に特有の, たった一人 (一つの), 単数の, 抜群の」) につながる<sup>(xi)</sup>。英語の例をあげる。

(44) a man of singular attainment (「すぐれた, 卓越した」) 新英和大

(45) a most singular story [phenomenon] (「まれな, 奇妙な」) 同上

(46) an event singular in history (「たった一つの」) 同上

語根 sim- 由来でラテン語を経て英語に入った語に *sincere* (「誠実な, 心からの」) がある。語根 sin- に、語根 ker- (「育つ」) がついたもので、ラテン語は *sincerus* (「完全な, 単なる, きれいな, 純粋な, 誠実な」) などの意味がある。英語の例をあげる<sup>(xii)</sup>。

(47) a sincere desire for knowledge 新英和大

(48) Is his grief sincere? 同上

(49) Please accept our sincere thanks. OALD

以上で、イタリック語派からの引用は終わりにする。

## 7 古典ギリシャ語とスラブ語派由来の語

次に、古典ギリシャ語に由来する語を分析するが、ギリシャ文字を使うと、煩雑なので、ローマ字化して表す。また長音記号なども省略することをお断りしておく。ラテン語の音声 [s] は、古典ギリシャ語の音声 [h] に普通対応する。英語に定着している語をあげれ

(xi) *singular* (非凡な, 珍しい) は、紙幅の関係で、今回は取り上げない、語根 *oino-* の *unique* と比喩的拡張は並行する。

(xii) ラテン語の文字 *c* の音価は [k] で、口蓋化などの音声変化を生じているが、ここでは、それは論じない。

ば、ラテン語由来の solar (「太陽の」) と古典ギリシャ語を基に 19 世紀に造語された helium (「(太陽の元素) ヘリウム」) があげられる。同じような音声の対応を示すのが、ギリシャ語系の語との連結系として使われる hom(o)-, hom(o)e(o)- である。これらは、それぞれ、古典ギリシャ語 homos (「同じの」) と homoios (「類似の」) に由来する：homonym (「同形同音異議語」) homosexual (「同性愛の」) homeopathy (「同毒療法」)

加えて、homal(o)- (「平らな」) という連結形も homos から来ている。英語に定着した語としては anomalous (「変則的な、奇妙な」) がある。この語は homalos (「平らな」) に否定の接頭辞 a- がついたものである。

C.T. Lewis の Elementary Latin Dictionary 巻末の語根集には、sem- に加え、sa- と sim- を together, like の意味でまとめている。hendec(a)- は「11 の」意味の連結形で、heis (「一」) の中性の主格形 hen と deca (「十」) が結びついたものである。

語根 sa- に plo- (「重」) が結合して生じたのが、hapl(o)- (「単一の、半数分裂の」) という連結形で haploid (「半数体」) が、生物学に定着している。

注目すべきは、語根 sem- から、古典ギリシャ語では heter(o)- という連結形が生まれている点である。これは、heteros (「異なる、別な」) の存在である。heterodoxy (「異端、異説」) heterosexual (「異性愛の」)

同一性と差異性が同じ語根から生まれていることは、両者の密接な結びつきを表しているといえよう。

最後に、スラブ語派のロシア語からの外来語として samvar (「ロシアのお茶用湯沸かし、サモワール」) がある。これは、語根 sem- に由来する (キリル文字はローマ字化) samo- (「それ自体で」) に varit (「ゆでる」) で作られている。

## 8 ゲルマン語派の同一性

同一性を表すゲルマン語派の語に \*likam がある。この語は、「体、外見、形」といった意味をもつものと想定される。日本語では、外から見た物事のありさま、様子を、「てい(体、態)」という。これはゲルマン語派の意味とつながるものであろう。

(14) の言い換えでも出てきているが、この語根につながる現代英語の例を以下にあげる。品詞としては、前置詞、形容詞、接続詞である。

(50) She's wearing a dress like mine. (「ような」) OALD

(51) He's very like his father. (「似ている」) 同上

(52) No one sings the blues like she did. (「ように」) 同上

この語は、古英語の geolic (「同じの、同じような、…の形の」) 起源で、中英語で、頭音がなくなった。元の形は、alike にその名残をとどめている。

(53) My sister and I do not look alike. OALD

(54) They tried to treat all their children alike. 同上

(55) Good management benefits employers and employees alike. 同上

ドイツ語やオランダ語では、gleich, gelijk のように、この部分は消失していない。

(56) Das gleiche, aber nicht dasselbe Auto (a similar car but not the same one)  
CGD

(57) Ich fahre de gleichewn Wagen wie Sie. (I drive the same car as you.) 同上

(58) Der Lehrer behandelt alle Kinder gleich. (The teacher tretas all the children equally.) 同上

(59) Dat is mij gelijk. (It is all the same to me.) Kranmers' Engels Woordenboek  
ドイツ語の gleich は、諺 (1) でも使われている。

英語の like に関連する語で、「死体」という意味の古風な語が, lich で, lichgate という埋葬前に棺を一時置く屋根付きの門にその名残をとどめている。対応するドイツ語が Leich (「死体」), オランダ語 lijk (「死体」) である。like は、接尾辞として godlike, snakelike のように名詞に付加され形容詞を生み出す。形容詞や分詞について副詞 (generally, surprisingly) を生み出す -ly も名詞について形容詞 (manly, scholarly) を作る -ly も関連する。ドイツ語とオランダ語では、それぞれ -lich (reichlich 「豊富に」, menschlich 「人間的な」) -lijk (moederlijk 「母親らしい」) となる。

では、なぜ「体, 外見, 様子」表す語が、「同じ」とつながるのであろうか。人間にとって視覚情報は、具体的な存在を見分ける場合、最も重要なものである。それをあるカテゴリーに入れるか否かでの判断基準となろう。このことが、見かけが、同一性と結びつく大きな理由であろう。

## 9 見ることとカテゴリー

見ることが、カテゴリーに分類することと関連することは、「種類」表す語彙を分析することで、明らかになる。生物学で、種類を表す語の一つが「種」である。英語 species は、いうまでもなく、語根 spek- に遡る。関連する語を以下にあげる。

占星術の用語として、中英語に流入したのが aspect である。現代英語では、「(事の) 様相, (物の) 面, (人の) 表情, 様子」などの意味でも用いられる。

(60) The book aims to cover all aspects of city life. OALD

(61) paint Mt. Fuji in its changing aspects 新英和大

この語は、ラテン語 aspicio (「目を向ける, 直面する, 感知する, 識別する等」) に遡る。カテゴリーの典型を表す語も、ラテン語の同じ語根に由来する specimen である。

(62) specimens of rocks and ores (「標本」) OALD

(63) a specimen of the 14<sup>th</sup> century handwriting (「見本」) 新英和大

この語は、ラテン語 specimen に由来するが、ラテン語の段階で、認知意味論に関連する「しるし, 象徴, 記号, 証拠, 様子, 外観, 手本, 見本, 典型, 模範, 化身等」といった意味がある。

さて、species は、かつては「外見, 外観」という意味をもっていた。現代英語の用例をあげる。

(64) There are many species of dogs. (種類, 品種) OALD

(65) a new species of heater (種類) 新英和大

元のラテン語には「一見, 光景, 現象, 外見, 外観, 表面, 容貌, 魅力, 見世物, 印象, 概念, 像, 類似, 個体, 形等」の意味がある。

ラテン語 species に関連する specialis は、古フランス語 especial を経て、英語に流入し



た。「特別な」という意味である。

(66) The lecture will be of especial interest to history students. OALD

(67) I have an especial dislike for cats. 新英和大

二重語として借用された special は, especial と微妙な意味の違いを普通帯びる。場合によっては, ほとんど意味は変わらない。

(68) The school will only allow this in special circumstances. (「例外的な」) OALD

(69) Some of the officials have special privileges. (「特別な」) 同上

(70) These teachers need special training. (「専門の」) 同上

(71) as a special favor to me (「格別の」) 新英和大

カテゴリーの典型的な例が, 際立って目立っている点に焦点が当たれば, 「独特な, 唯一の, 特別な」といった意味が浮かび上がるのに対して, カテゴリーに所属する他の存在との共通点や類似性に焦点が当てられ, カテゴリー全体をとらえ, 「種類, 標本」といった意味が生じる。

## 10 語根 gen-

同一性と差異性に絡む語根として gen- がある<sup>(xiii)</sup>。Lewis の語根リストには, これに加え, gn- と gna- があり, 「(父親が) 子をもうける, 生じさせる」という意味である。ゲルマン語派では, いわゆるグリムの子音推移に従い, 音声 [g] は [k] に変化した。カテゴリーに関係する語として kind があり, 「種類, 類, (生まれながらの) 性質」などの意味がある。

(72) Exercises of this kind are very popular. OALD

(73) It takes all kinds to make a world. 新英和大

(74) the cat kind (属) 同上

この語は, 現代英語の kin を生み出した古英語の語に, 抽象名詞語尾が付加されて生まれた語である。古英語には, 「本性, やり方」という意味もあった。他のゲルマン系の言語には伝わっていない。カテゴリーへの所属を表す a kind of ~ ([~の類]) は, OED によれば, シェークスピアの The Two Gentlemen of Verona に初出例がある。

(75) My master is a kind of a knave.

これも, すでにあげた (A seems to be a.) と結びつく現代英語の (A is a kind of a.) につながる。a をカテゴリー A の周辺的な成員として組み込む表現である。

「種類」を表す kind を生み出した kin は古風な語で, 「親族, 親戚で, 同種類で, 同類」などの意味がある。関連する akin (「同種の, 類似の, 同族の」) がある。

(76) What he felt was more akin to pity than love. OALD

(77) They are near akin to him. (近親で) 新英和大

ドイツ語では, 関連語として Kind (「子供」) がある。英語には kindergarten (「幼稚園」) が入っている。主要言語として英語に最も近いオランダ語では, kin に対応する kunne が

---

(xiii) ラテン文字 g の音価 [g] は, 無声音 [k] 同様, 各言語で, 口蓋化などの変化を起こしたが, それについては, ここでは論じない。

あり、この語は「性別、性」を意味する。Nederlands Etymologisch Woordenboekによれば、中(期)オランダ語の *cone, cunne* の語義として、次の現代オランダ語：*geslacht* (「世代、一族、家系、血統、種類、類、性、性別、」) *afkomst* (「家系、血統、生まれ、起源」) *seks* (「性、性別」) *soort* (「種類、類」) でそれを説明している。

*kin* に接尾辞 *-ing* が結びついて生まれたが *king* である。原義は、「部族が生み出した者」ないしは、「部族を生み出した父祖」であろう。対応するドイツ語。オランダ語は、それぞれ *König* と *koning* である。

ラテン語由来の語では、先ずあげるべきは *general* であろう。此の語は、ラテン語 *generalis* (「種族に関する、一般的な、普遍的な」) に由来し、ラテン語 *genus* から生れた語である。ラテン語 *genus* には次の意味がある：生まれ、素性、家系、血統、高貴な血、貴族、子孫、子供、民族、種族、種、品質、本性、性質、性(自然の、文法上の)、様式、型

ある血筋に生まれたものは、当然、外見は似ていて、種族として、全体から見れば、同じような性質をもつ。ラテン語 *genus* は、ギリシャ語 *genos* の訳語である。この語は *gignomai* の名詞形で、「同じ祖先から生れたもの」という意味である。新英和大の *general* の用例と訳語を以下にあげる。

- (78) a general attack ((社会・団体などの) 全員に関する) 総攻撃
- (79) general principles 一般原則
- (80) general custom (社会の大部分に共通な) 世間一般の慣行
- (81) general affairs (特定の一部門に限らない) 庶務
- (82) general comments (大体の) 概説

アリストテレスの *genos* が広い範囲を適用される「類」として、*eidos* が狭い範囲に適用される「種」として *species* が翻訳借用された結果、生物学では、*species* 「種」の上位概念として *genus* 「属」が用いられる。

ラテン語 *genus* に関連する動詞が *genero* で、「(子を)こしらえる、生産する、創造する、(受動相) 生まれる、由来する、子孫である」などを意味する。現代英語では、*generate* として借用されている。

- (83) to generate electricity/heat/power OALD
- (84) A sensation was generated by his speech. 新英和大

その名詞形 *generation* には、ラテン語 *genus* につながる意味をとどめている。

- (85) My generation have grown up without the experience of a world war. OALD
- (86) They have been living here for four generations. 新英和大
- (87) The Czar and all his generation were murdered in the revolution. (一族) 同上

現代英語では、「文法の性、社会的、文化的性別」を表す *gender* も、かつては、「肉体的性別、生まれたもの、子供」を表していた。

語根 *gn-* と *gna-* 由来で、カテゴリーに絡む語を以下にあげる。ラテン語 *praegnans* に由来するのが、*pregnant* (「妊娠している；充滿して；含蓄のある」) である。

- (88) I was pregnant with our third child at the time. OALD
- (89) Her silences were pregnant with criticism. 同上
- (90) a phrase pregnant with meaning 新英和大

語頭の [g] が脱落した多くの語がある。アルファベット順に関連するラテン語とその

語義をあげる：nascor (生まれる, の子孫である, 生じる), natio (生まれ, 誕生, 血統, 素性, 民族, 部族, 人種, 国家, 国民 (性), 階層, 仲間), natura (生まれ, 自然, 自然の性情, 構造, 体格, 人の本性, 気質, 性格, 創造主, 自然の法則, 道理, 秩序, 世界, 宇宙, 神羅万象), naturalis (生まれながらの, 生来の, 生得の, 自然の, 天然の), natus (生まれた, 生まれながらに身についた, 生まれるとともに運命づけられた, …才の) 以下に現代英語の例をあげる。

(91) an independent nation (国家) OALD

(92) The entire nation, it seemed, was watching TV. (国民) 同上

(93) Jewish nation (民族) 新英和大

nation は nasci (-to be born) の過去分詞に由来する。native も同じである。

(94) a native American citizen (その土地生まれの) 新英和大

(95) native cheerfulness (生まれつきの) 同上

nature も同じく nasci に遡る。

(96) the beauties of nature (自然) OALD

(97) It's not in his nature to be unkind. (性情) 同上

(98) It's difficult to define the exact nature of the problem. (本質) 同上

natural は naturalis からきている。

(99) natural disasters (自然の) OALD

(100) It's only natural to worry about your children. (人情として当然で) 同上

(101) It is only natural that economic difficulties (should) follow war. (当然で) 新英和大

## 11 生むこととヴィトゲンシュタインの家族的類似性

以上, 主に, 語根 gen- の意味の変化をつぶさに見ると, ヴィトゲンシュタインの主張で認知意味論のカテゴリー観に多大な影響を与えている「家族的類似性 (family resemblance)」を彷彿とさせる。ヴィトゲンシュタインは Philosophische Untersuchungen で, ドイツ語 Spiel (「遊び, ゲーム, 競技, 遊技」) を例に, その語で呼ばれるすべてに満たす特性のないことを, 数世代の家族が, 身体的特徴 (目鼻立ち, 体格など) のいくつかで似ているが, 家族全員に共有されている特徴がないことから, そのように称したわけである。

「父親が子をもうける」を中心に, 他の語根の例も併せて敷衍すると, その子供 (現代ドイツ語: Kind ラテン語: genus) が代を重ねていくと, そこに血統 (現代オランダ語: kunne ラテン語: genus, natio) と一族, 部族 (現代英語: kin 現代オランダ語: kunne ラテン語: genus, natio) が生まれる。血のつながった人たちには, 当然, 外見の類似 (ラテン語: species, natura) や同じような性格や気質 (現代英語: kind ラテン語 natura) を帯びる。これこそヴィトゲンシュタインの家族的類似にほかならない。これを一族以外に一般化すれば, 種類 (現代英語 kind 現代オランダ語: kunne ラテン語: genus) となる。

以上, 認知意味論のカテゴリー観の特徴が, 語彙の意味変化で裏づけられることを説明

した。関連する語根すべてに触れたわけではないので、それについては、今後の発表であきらかにしたいと考えている。

[参考文献]

- Geeraerts, D. 2010 *Theories of Lexical Semantics*, Oxford University Press, Oxford.  
国廣哲弥 1982 『意味論の方法』 大修館書店  
Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.  
山口裕之 2019 『語源から哲学がわかる事典』 日本実業出版社  
Wittgenstein, L. 1953 *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, Berlin.

[辞書, 辞典]

- Bareggi, C. 2001 *Oxford Paravia II Dizionario Inglese Italiano · Italiano Inglese*, Paravia Bruno Mondadori Editori e Oxford University Press.  
Jan de Vries, 1997 *Nederlands Etymologisch Woordenboek*, Brill, Leiden.  
Kluge, F. Bearb. Von Elmar Seebold 1995 *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, Walter de Gruyter, Berlin.  
國原吉之助 2005 『古典ラテン語辞典』 大学書林.  
関松孝二他1名編 1985 『独和大辞典』 小学館.  
Lewis, C.T. 1891 *Elementary Latin Dictionary*. Oxford University Press, Oxford.  
Prick van Welly, 1970 *Kramers' Woordenboek Engels*. Vijfendertigste, Haag.  
竹林滋・寺澤芳雄・小島義郎・東信行・安藤貞雄・川上道生(編) 『新英和大辞典 第六版』 研究社(新英和大)  
辻幸夫他名編 2019 『認知言語学大事典』 朝倉書店  
寺澤芳雄 1997 『英語語源大辞典』 研究社.

(2022.9.16 受稿, 2022.11.11 受理)

[Abstract]

The purpose of this research is to compare historical changes of senses of some words and the view on categories taken by semanticists such as Geeraerts and elucidate the similarities between them. In Cognitive Semantics some (or most) categories are said to have the following properties: first, linguistic categories may be fuzzy at the edges, i.e. that there are salient central members and marginal members. Secondly some categories cannot be defined in terms of necessary and sufficient attributes. In such cases family resemblance relations are considered to be valid, which was proposed by Wittgenstein.